

いつかルシファーを一
発殴るために

ぱせり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グラブル世界にとあるキャラの娘として転生した生前男の五歳児が数年後に始まる本編に向けて好き勝手生きると話。舞台はフェードラツヘから始まるので四騎士の絡みあり。書いてる奴は騎空士歴一年のrank175なので過去イベは知りませんがゲームはそこそこやっています。

0 0 0 0 0
5 4 3 2 1

--	--	--	--	--

36 23 13 8 1

目次

物語の導入部でよくある、意識不明からの覚醒つてやつ。俺の経験から言わせてもらうと、意識が落ちたって自覚は無いし眠っている感じも無かった。

俺の場合は崖からの転落、頭部に強烈な痛みが走って眼の前が真っ暗になった。実際の意識はそこで落ちたのだろうが、俺の感覚では痛みに目をつむっていただけ。じんじんと響く痛みは続いていたし、多少和らいだかなって感じて目を開けたら病室らしき寝台の上よ。つまり、時間の経過が全く感じられなかったんだ。だから状況把握にも時間が必要だったんだけど、それよりも咄嗟に「やべえ、保険証持ってたっけ!？」と叫んだ俺は自分の大声が頭に響いて再び寝台に沈む阿呆だった。

汚い呻き声を上げる俺が落ち着くまでたっぶり五分。頃合いを見計らって差し出された水を何の警戒も無しに受け取って一気飲みできる位には冷静さを取り戻していた。

此処が何処で、自分が誰で、今まで何をしていたのかを——私は思い出したのだ。



その少女は王都フェードラツへの城下町で一番の人気を誇る飯屋の一人娘として五年前に誕生した。父はいないが商魂逞しいヒューマンの母と祖父母と共に家業を手伝いながら育つてきた彼女は、多少大人びているが勝ち気で少年のような活発さの子供だった。幼い頃から接客業に携わつてきたおかげで人付き合いも良く、近所に住む同世代の友人たちは種族隔てなく多い。

その日も手伝いを終えた少女がいつも通り外壁横の馬車停留空き地に向かうと既に集まっていた友人たちが何やらこそこそと話し合っていた。商人の跡取り息子であるハーヴィンのティポルトが街で噂になつている『騎士団の壁外調査』の場所を掴んだというのだ。子供にとつて騎士団というのは街で見かける憲兵よりも憧れの強い職種。それが間近で見られるというなら、満場一致で彼らの方針は決まつた。

興奮高まる子どもたちは秘密の壁穴へと走り、誰の目もないことを確認してすぐさま外へと駆け出した。十に満たない子供たちではあるが、中でも酒屋の息子であるドラフのダツカは種族の特徴的な体格の良さと配達業務で鍛えられた身体を生かして先頭を買つて出る。それを補佐するのが八百屋の娘、エルーンのミリイだ。彼女は自前の畑で度々現れる害獣駆除のお陰か気配に敏感で、魔物が近づけばすぐさま指揮を取り安全な方向へ誘導する。なまじ腕のある子供たちが揃っていたせいも、度々外に出ては小さな冒険を繰り返していた彼らは失敗を経験したことがなかったのだ。今日の遠出も

ちよつとだけ、こつそり見に行くだけ、彼らはいつも通りの無謀な冒険に危機感を抱くことはなかった。

騎士団が作業をしている現場のすぐ近く、むしろ頭上といつてもいい切り立った崖上の森の中。子供たちは規律を乱さず周囲を警戒する騎士団員たちの甲冑や足並みの揃った隊列を見て静かな歓声を上げていた。式典でしかお目にかかれないう騎士のかっこよさを堪能したところで、好奇心旺盛な子供たちの視線は流れるように別の物へと移っていった。

「あれ、何だと思う?」

ティポルトが言わずとも全員が頭に疑問符を浮かべていた。それは騎士団に囲まれた崖にめり込むように刺さる巨大な丸い物体だった。調査団らしき学者と共に屈強な騎士たちが壁を削り掘り出しているが、飛び出ている部分だけでも成人ドラフ男性と比較すると何人分に当たるだろうか。

「おつきーい」

「光ってるから鉱石かな」

「表面が反射してるだけかもよ」

「中から地底人が出てくるんだろ?」

「ちよつと押さないでよ!」

「痛つ、あぶねーだろ!？」

子供たちの立ち位置からすれば真下を覗き込むような体勢でないと視界に映せないそれに、自然と彼らの姿勢が前屈みになっていく。我先へと前へ押し出すように詰めていく子供たちはすっかり周囲の警戒を怠っていたのだ。そして足音に気づいたミリイが知らせる前に、背後から怒号が投げつけられた。

「そこにいるのは誰だ!？」

文字通りひっくり返った子供たち。その心情は焦りに満ちていた。見つかった、どうする、逃げよう。思考は一瞬、直ぐ様彼らは駆け出した。自分たちの立ち位置すら忘れて踏み出したその足が、ただ一人、空を切るとも知らずに。

「あつ」

三人が振り返った一瞬、こちらへ向けて手を伸ばしながらゆっくりと後ろに倒れていくティポルトが見えた。

見えた、と少女は確かに感じたのだ。見ただけで、何も考えていなかった。

その証拠に、反射的に伸ばした手がティポルトの手を掴んでいても、少女にはどうすることも出来なかった。

崖下へと遠ざかる手を掴んだからといって、少女には回避する頭脳も身体能力もなく、自らも共に落ちていくだけ。

それなのに少女は——俺は、安堵していた。

後はそのまま落っこちて頭ドカーンのお星様よ。我ながらよく生きてたものだ。

隣の寝台に寝かされているハーヴィンの友人も五体満足そうだし、俺もこの程度の怪我で済んでよかったと喜ぶべきか。未だに痛む頭部を擦りつつ、傍らに佇む俺の相棒へと視線を合わせる。

「久しぶり、アイ。元気にしてた?」

ヒューマンの成人女性を外装に形作った相棒が、恭しく礼を取る。生前の趣味全開で作った綺麗系の美女はスラリとしたモデル体型でセミロングの銀髪をサラリと揺らす。スーツ姿が様になっている。変わらない忠誠に、よくもまあ性別までも違う今の俺を主だとわかったものだと思ろしく思う。思っただけでも、こいつなら有り得ると納得も出来るので疑問には思わない。

「保険証とか、懐かしい単語使ったな……何年ぶりだ?」

『マスターが接続を切られる大凡二千年前までは把握しておりますが、それ以降は分かりかねます』

「待って、俺の聞き間違い?」

自分の耳が正しければ、千年単位で物事を測っていなかったか? 期待を込めて傍らの機械知生命体を見ても、表情の変わらないアンドロイドである相棒は淡々と同じ言葉

を繰り返すのみ。マジかよ……。

頭を抱えてまた唸りだした俺をじっと見つめる相棒が、不調を疑う。

「強いて言えば頭を打ったせいとか、たんこぶができたみたいに痛い……」

『頭部損傷は確認されておりません。記憶障害かと推測します。再度施術をされますか』

「……せじゆつ?」

『施術内容はマスターの残された記憶の転写になります。麻酔を投与後、頭部へのスキャンを施』

「もおおおおそれ以上はいい!! 聞きたくない!!」

『イエス、マスター』

「というか、俺の意思を無視して何でそんな危ないことしちやつてるわけ!？」

『私がマスター以外の命令に従うことはありません』

「ですよーってことは俺かああああ!」

過去の俺、爆発しろ。

とまあ、後悔したところで仕方がない。むしろ始まらない。今やるべきことは?

「状況の整理だ。俺の記憶では覇空戦争すら始まっていない。ましてやお前が命じられた記憶の転写すら覚えがないんだが、俺の最後はどうなっていたんだ? それと、あの

馬鹿野郎……ルシファーはどうした」

今でこそフェードラツへ出身ヒューマン五歳女兒である俺だが、生前は日本生まれの成人男性でした。職業とか年齢は聞かないで。あ、勿論騎空士です。rankは175くらい。まだまだゴリラには程遠いけど、チンパンジーくらいには成れたかなって程度。

そんな俺が何故、グランブルーファンタジーの世界の記憶を持っているのか。

それは俺をこの世界に引きずり込んだ諸悪の根源、そして唯一無二の友であった星の民であるルシファーが全ての元凶だった。

「順を追って確認していくぞ。俺はあいつに召喚された召喚獣、召喚目的は未来を識る者。選ばれた基準はなし。偶然俺だった。OK?」

『相違ありません』

「ゲームの世界観とか何千年先の話しか知らない俺じゃ殆ど意味がなかった。けど帰れないし仕方ないからあいつの助手みたいな立場になって一緒に暮らしてた。そこで魔法を覚えたり星晶獣とか作ったりした。お前は記念すべき俺の第一作目。合ってるよな?」

『光栄です、マスター』

前世の俺がルシファーと試行錯誤しながら作った機械知生命体、そして聖晶獣のプロトタイプとなったこいつだが、本体核は目の前の義体ではなく俺のスマホだったりする。聖晶獣が島と契約するのと同じく、こいつは島ではなく戦艦を母体として自由に航行できる仕様だ。もちろん本体核は戦艦に隠されている。先程まで俺達が覗き見ていた巨大な球状の物体だが、今だからこそわかる、あれは艦の一部に過ぎない。大部分が崖どころか地中に埋まっているのだろう。

「その俺至上主義なところ、初期は無かったはずんだけどなあ……なんでこんな成長しちゃったんだろ。まあいいや。後はなんやかんやあいつらとお前たちと楽しく暮らしてた。俺の記憶は大体そんな感じ。自分の最期とかも全く覚えがない」

この身体に生まれ変わっているということは、生前の俺は死んだのだろう。まさか肉体だけ保存されているということもあるかもしれないが、魂がここにあるのだからそれはもう俺ではない。相棒が俺を主認定していることから確信できる。

「で、今の俺はフェードラツへで生まれたヒューマンの五歳児。それも女の子なんだな……ははっ、どうしよう?」

『淑女教育を希望されますか』

「はい」

飯屋の娘がそんなの覚えたって何処で披露する機会があるってんだ。というか、俺が目覚めなくてもこの娘は結構な男勝りでお転婆だ。将来的にお淑やかに育つことは確実がない。断言できる。

「生前の俺はこの身体に生まれるって知ってたのか？」

『——ERROR:code00』

「これもダメなのかよ!？」

子供の身体は我慢が効きにくいのか、俺は衝動のまま地団駄を踏んだ。許して、このやり取り既に両手の数を越えてるの。

アイの「[ERROR:code00]とは管理者権限によってブロックされている機密事項だ。勿論、管理者とは俺のこと。じゃあ何で解除出来ないのかって？ 生前の俺がパスワード変更してるからに決まってんだろおおお!!」

「マジ死ねよ俺」

『既に死んでおります、マスター』

「マジレスやめて」

とまあ、こんな感じで先程からずつと生前の俺とルシファーについてを探る応酬を繰り広げているのですが、戦果は全く得られておりません。俺ってばそんなに恥ずかしい最期だったの？ めっちゃ気になるわ。どうせ知るのも俺だけだからよくないか。

ダメですか、そうですか。ケチー！

「じゃあこの質問で終わりにしよう。俺とティポルトは崖上から真つ逆さまだったはずだ。俺が此処で目覚めるまでの経緯が欲しい」

『イエス、マスター。マスターの魔力を感知後、落下中のお二人を転移にて艦内に収容。ハーヴィンの児童には機密保持の為に睡眠魔法を掛けてあります。マスターにはご説明した通り記憶転写の施術を、以上になります』

崖から紐なしバンジーが何故五体満足なのかは解ったけど、俺の頭痛が……まさか、頭開けたのか!? うへえ、怖くて聞けねえ。

切り替えていこう。アイは俺の魔力を感知したと言っていた。しかしこの身体は魔法を使ったことがない。よって魔力の操作も出来なかったはずだ。火事場の馬鹿力で魔力が出たのか、それとも元から垂れ流し状態だったのか。

「というか、俺が使い方を完全に忘れてるせいで魔力の確認ができねえ」

『マスターは私をお造りになられてからご自分で魔法、魔術の類を使用する頻度が滅多にありませんでしたから』

「生前の怠慢が来世で響くなんて思いもよらんだろ……!」

今度は項垂れる俺に、相棒がそつと肩を叩く。顔を上げれば優しく右手を取られ、人差し指に細身のシルバーリングが嵌められた。ああ、そういやこんなの着けてたな。

『マスター、使い方は覚えておられますか？』

「それはもう、魔法の使い方をさっぱり忘れるくらいにはお前が便利すぎて染み付いてる」

『光荣です、マスター』

「だから喜ぶなよ……」

過去にルシファーも認める最強の装備を手に入れた俺は、そろそろ戻ることにした。何より時間がヤバイ。昼の鐘が鳴ってからすでに一時間以上経過している上に、置いてきてしまった友人二人の行方も気になる。

外の様子をアイに聞けば依然として騎士団が取り囲んでいるとのこと。子供らしき生体反応も傍にあるので迎えに行くのは確定だ。この艦はステルスモードで街の近場、人のいないところに停泊してもらうことで話が纏まった。

ティポルトを背負った俺が「じゃあ行ってくる」と軽く手を上げれば綺麗なお辞儀でアイが見送ってくれた。一瞬の暗転、足が地に着く感覚と同時に目の前の景色が変わる。ご丁寧にも人がいない森の中へ転送してくれた相棒の気遣いに感謝しつつ、俺は友人たちが待つ騎士団の元へと歩き出した。

03

「無事で……ぐすつ、よ、がっだ……」

「もう心配したんだからあゝ！」

森の中から現れた俺達を見つけた友人たちは大人の囲いを振り切って一目散に駆け寄ってきた。熱い涙の抱擁、オマケに鼻水付き。ちなみにティポルトを背負っている俺に彼らを剥がす術はない。両手が塞がっているからね。

『対象を排除しますか』

止めてください大切な友人なんですうううう！

脳内に響く相棒の声アナウンスに内心で特大の×印を掲げる。危ねー……少しでも不快に思うとコレが発動するの忘れてたわ。

先程渡された指輪は相棒の端末、これを肌に身につけることによつて俺とアイは精神感応常時接続状態となる。離れていようが脳内でやり取りが可能、というか隠し事が一切できない。機械がいくら記録しようが俺しか閲覧できないならと、大雑把な俺が製造前にお気楽に決めたことでその後一生のプライバシーを捨てることになるとは思ひもよらなかつたぜ。

詳しい原理は忘れたが、ルシファアの真理の真髓がつまつた超一級品であることは間違いない。相棒の主至上主義は俺に関する肉体、精神問わず全てに及ぶ。便利な自動防衛機能な反面、外敵判定されると問答無用で排除されてしまうのが悩みどころ。過去幾度となくこの過保護に困らされてきたものだ。

いくら記憶が転写されたからといって全部が全部飲み込んでいる訳じゃないのがよくわかつたよ。徐々に思い出し出していかないとな。

そう、思い出す……思い出しちゃつたんだよなあ……。

友人たちの隙間から見える、遠く離れた騎士団の密集する一角に目立つ赤の甲冑。遠目からでも目立つ鮮やかな赤髪をじつと見つめてみると、それを見逃さない相棒の自動フォーカスが入った。

『対象周辺の音声をピックアップします』

「——シヴァル副団長、捜索対象二名の児童が見つかつたようです」

「よし、森へ散つた捜索班の回収を急がせろ。日没までに王都へ戻るぞ」

「イエッサー！」

間違ひなく炎帝さんですね。つてことは王様まだ生きてるのか。うわー、今本編の何年前なんだろう。パーさんの年齢がわかれば逆算できるよな。ちよつと声掛けてこようかな。

『それは所謂“ナンパ”ですか』

下心なんて無いから！ 誰だよお前にそんな言葉教えたのは!! 俺しかないよなサーセン!!

いや待てよ、幼女が「おにーさん、何歳？」って聞くのはセーフなのでは……？ そうだぞ俺、外見のアドバンテージを存分に生かしていけ。

『マスター、ご友人が返答を急かしています』

途端に音声が切り替わり、友人の大声が鼓膜を強打した。

「聞こえてる!? 喋れないの!? 何処か怪我したの!？」

「つごめん、今聞いた……何だった？」

「何それ!? 大丈夫なの!？」

「五体満足ですのでご心配なく」

ゴタイ……? と意味がわかっていないミリイに笑って安心させてから、二人の監視役だろもう少し離れた位置に待機していた騎士へ頭を下げた。見守ってくれていた騎士は溜息を吐いてから「お説教は帰り道で。耳にタコが出来るのを覚悟するように」と告げて、背負ったティポルトを受け取ろうと手を伸ばしてくれた。それにお礼を言っただけ。腕が辛くなったら言うんだぞと素直に引いてくれたこの騎士は良い人だ。普通の幼女じゃとつくに疲れてギブアップしているだろうが、今の俺は相棒の補助があるので

ハーヴェインの子供一人背負うくらい朝飯前だったりする。それよりも聞きたいことが山程あるので質問タイムといこうじゃないか。よーし、早速幼女パワー全開で媚びていくぞ！

「ねえねえ騎士様、あの大きいのは掘り出してどうするの？」

「君たちが知ることではないよ」

「じゃあ、あれが何かわかったの？」

「それを調べるために我々が調査にきているんだ」

推測だが、地表に飛び出ている僅かな一部分だけでは何も解らなかつた、ということかな。

それもそのはず。アイの母艦はこの時代では明らかなオーバーテクノロジーだ。移動することは決定していても、人目が消えてからでないといけない。聞けば帰還する部隊とは別に保護を目的とした常駐部隊もいるらしい。早いとこ隠さないとマズイのだが、かといつて一夜のうちに消えても問題になるし。

『問題にさせなければよろしいのでは』

と、いいますと？

『この場にいる全員の記憶を改竄します』

止めた所で脳の足りない今の俺じゃあ代替案もないし、お任せしちやおうかな。

『イエス、マスター。昔から面倒臭がると私に一任するところはお変わりありませんね』
頼れる相棒を持つと主人は怠けるの。俺がこうなったのはお前のせいよ？

『光荣です、マスター』



眼の前に広がる人間の海は中々に圧巻である。いつの間にもここは戦場になったのか。自白すると犯人は俺です。ごめんなさい。

相棒へGOサインを出した次の瞬間、糸が切れたように騎士たちはバタバタ倒れていった。甲冑の音がすげえ響いてちよつとしたホラーだったぜ。

何が起きたかもわからず仕舞い、敵襲だと声を上げる暇もなく落ちる超速攻性。人体には無害な催眠ガスを魔法で散布しただけです。ご安心。友人たちだけは俺がゆっくり地面へ寝かせる特別待遇です。そんな人海の中、剣を支えにこちらへ殺気を向ける人影——間違いなくパーシヴァルだろう、赤髪の騎士が吠えた。

「貴様、一体何をした!？」

「ちよつと眠ってもらっただけです。安心してください。危害は加えませんし、周囲の魔物も認識障害を一带に張り巡らせているので危険はありません」

「そんな言葉が信じられるか!!」

まあ、その通りだろうな。向こうからしたら怪しい子供の姿をした魔物にしか見えな
いだろう。それも知能を持った上位の、更に人質付き。なんだかラスボスにでもなった
気分だよ。

『濃度の設定ミスです。申し訳ありませんでした』

いやいや、子供もいるんだからあんまり強いと害が出るし。これが最善だったはず。
多分だけど、パーシヴァルはイイトコの貴族出身だし魔法や毒に耐性があったりするん
じゃないかな。それに、タイマンのこの状況は俺にとって逆に都合が良かったりする。

「つと、その前に……」

今にも一戦始まりそうな気配があるので、先に友人たちの安全確保だ。ちよちよいと
三人の記憶をいじって、今日の俺達は山の中を走り回って遊んでいたということにして
おく。いつもの空き地は周辺に憲兵の詰め所があるのでこのまま転送しても問題なか
ろう。遊び疲れて寝てしまったという考えに至るはずだ。俺だけいなくても、忘れ物を
して取りに戻ったのかなと思ってくれるだろう。後は転送先で巡回の警邏が見つけれ
起こしてくれる。

『対象範囲設定完了、転送します』

音も立てずに姿を消した子どもたちを見たせいだろう、パーシヴァルが勢いよく突つ

込んでくるのが視界の端に映った。常人である俺にはそこまで脳が理解する頃にはすでに相棒の自動防御が発動して剣を防いでいた。

「子ども達をどこへやった!?!」

「街へ送っただけですって。危害は加えないって先程言いましたよね?」

滝汗をかきながら鬼の形相で剣を振り下ろす姿勢で止まっている成人男性とか、いくらイケメンでも普通に怖いわ。普通に会話しているように見えるけど俺の膝今すげえ笑ってるから。もうガックガクだから。辛うじて被ってた猫も剥がれ落ちそう。というかも無理。

『対象を排除しますか』

そういう物騒なのいいんで、さっさと片付けて帰りたいです。あーでも、パーシヴァルには聞きたいことあるしなあ。

どうするべきか、考えている間に押し斬れないと判断した。パーシヴァルが間合いを取って下がった。

「此処にいる者たちをどうするつもりだ!」

「どうもしません。調査団は遺掘品の調査に来たはずがいつのまにか船が消えていた、その捜索をしたが見つからなかったと城へ報告を持って帰るだけです」

「貴様に従う理由はない!」

「ははっ、理由もなにも」

今まで見てきた記憶がなくなるんだから。そう言おうとして、ふと思いとどまる。

「そうだな、面白そうだから貴方以外の記憶を消してあげましょう。自分以外がこの惨状を覚えていなくて、そして信じてもらえない。副団長、勤務中に居眠りは感心しませぬね。なんて言われたりして」

俺今すつげえ悪役な気分半端ない。猫がいなくなつて魔王降臨しちやつたか。もう取り繕えればそれでいいや。チビらないだけマシ。

「安心してください、全員傷は癒やしてから送り届けます。今日は意地悪してすみませぬ。私は城下の大衆食堂の女将の一人娘ですので、よかつたら食べにきてください。お詫びに奢りますよ」

なけなしの笑顔を浮かべて指パッチン。演出は大事だよ。そして目の前の脅威は膝から崩れ落ちていった。相棒の鑑定では意識混濁状態と出ている。まだ抵抗できるのかよ、すげえな炎帝。

倒れ伏したパーシバルに近づき、その綺麗な赤髪を撫でる。いい夢が見れるようにおまじないを掛けながら。

「おやすみ、パーシイちゃん」

今度こそ浸透していった睡眠魔法がしっかりと彼の意識が落ちたことを確認して、俺

は大きく息を吐いた。



今日は大変な一日だったなど、文字通り人生の転換期を乗り越えた俺がようやく帰宅できた嬉しさに「ただいま」を大声で宣言した瞬間。振ってきたのは母親の拳骨でした。本日二度目の頭部負傷に悶絶して転がる俺に頭上から母親のお叱りが飛ぶ。

「こんな時間まで何処ほつき歩いてたんだい、この馬鹿娘！　これから明日の仕込みがあるつてのに。遊んだっけは払ってもらうからね」

痛みに唸りながら「へーい……」と気の抜けた返事をして立ち上がる。ちなみに玄関を跨ぐ前に相棒へは家族からの接触は全て白判定を出すように設定済み。うちの親は鉄拳制裁教育なので絶対こうなると思ったんだ。

「あ、そうだ母さん。この前火傷したところ見せて」

「なんだい突然」

いいから、と無理やり腕を引っ張って手を見る。常に厨房に立つ母親の手は職人といえど聞こえはいいだろうが、決して見栄えのよいものではない。油ハネの火傷、水仕事の輝、包丁の握り胼胝など。その中でも先日つけた火傷の痕は大きく残った。子どもの

目でもわかるそれに、常々気を揉んでいたのだ。

もう痛くないからと手を引こうとする親を両手で握りしめて止める。小さな子ども両手でも包みきれない親の片手だが、俺の治療魔法ならそんなの関係ない。

対象は手……いや両手……もう面倒くせえ、全身治しちゃえ。

握った端から漏れる淡い光はどことなく暖かく、やがてそれは母親の全身を覆う。五秒にも満たない奇跡は母親が驚く間に終わった。念のために手をひっくり返して自分の目で確認。うん、傷一つ無し。

「はい、おしまい」

「ちよつ、あんた一体どこで魔法なんか……!」

「細かいことは気にしない気にしない。それより手伝う前に着替えてくるね」

ぼかーんな母親を尻目に俺は自室へと走った。良いことをしたと自己満足した俺は、そうだ他の皆にもやってあげようと安直な思考で今度は祖父母へ突撃。そして今度こそ何処で習ったと家族から問い詰められて早まった行動をしたと反省するのだった。

あれから一ヶ月が経った。記憶が戻ったからといって、特別何か変わったかといえは……まあ俺自身は変わったけど。俺の生活に大きな変化があったわけではない。家業の食堂を手伝う毎日は恙無く続いているし、むしろ魔法を取得したおかげで子どもが出来ることが増えたせいかもしれない。ぶっちゃけ俺が出来すぎて仕事量が倍ドンである。といつても姿は子どももの俺がホールで歩き回るには身体が小さすぎて無意味、主に裏方の仕事をこなす日々だ。今日も朝から何百食の準備をしたことやら。

そして現在、うちの食堂ではお昼のランチ戦争中である。

「日替わりBあと五皿です！」

「Aも追加ください！」

「出来上がってんのが見えねえのか!? とつとつ持つてけ！」

「配膳遅いよ誰かフォロワー入って！」

これでも城下で一番大きな食堂、そして人気を誇ると自負している訳だが、それにしたってここ最近の繁盛さは異常である。満席は当たり前で外の入り口横には長蛇の列が並び毎日だ。営業時間中は寵の番人と化する俺に店内は見えないが、厨房の奥まで客

の喧騒が届くのだからそれだけ人が密集しているのだろう。

「女将さんっ、圧倒的人手不足!」

「そんなの見りやわかっただよ、口より手を動かしな!」

「明日からうちの妹連れてくるんで雇ってもらっていいですか!」

「何人でもこい! 他にも暇な家族がいたら連れてきな!!」

徴兵される家族には可哀想だが、その分の見返りはあるので安心してほしい。うちは今給金弾んでるからな。美味しい賄いもつくよ。

本日の日替わりはロールキャベツとチーズグラタンでございます。単品でも無料でパンを一個サービス、セットにするとスープとサラダが追加。大盛りはやつてませんので二人前買ってね。日本じゃありえないけど、この世界の人たちは大食漢が多いから成人男性だと余裕で二人前食べていく人が多い。日替わりABセットが一番人気です。四人前食べていく猛者もたまに見かけるな。おそろしや。

どちらかというとな男性客の比率が高いお昼時はやはり肉に勝敗が上がる。ラストオーダーまであと一時間だけど、ロールキャベツの残りが三十を切りそうなので早めに切り上げよう。

「キャシーさん手が空いたら今外に並んでいる人たちに明日の優先券を渡してきてもらっていいですか?」

「了解つ、クローズの札もかけてきます！」

ホールスタッフの中で一番若手のドラフ女性に声をかければ、即座に走り去って行く。たわわなメロンが揺れないその走法、まさに歴戦の伝令役つてところかな。感心している件と彼女の彼女がトンボ返りで戻ってきた。それもかなり焦りながら。

どうしたと声を掛ける暇もない今は誰も相手にできない。唯一手の空いている俺じゃ何の力にもなれないのは解りきっている。ごめんな幼女で。何もしないのも気が引けるので、丁度ホールから戻ってきた母親を捕まえてキャシーさんを指差す。以心伝心って程じゃないけど、意を組んでくれた母親は何も言わずに向かつてくれた。

「あのあのあの、今騎士団の人が外に……」

「はあ!？」

内緒話をするように母親の耳元に手を当てたキャシーさんに視線を当てていた俺は、相棒の自動フォーカスが入るので小声でもバツチリ聞こえました。はいはい、俺のお客さんだね。ちょうどオーダーもストップしたところだし、竈から離れても問題ないかな。同じ裏方業務のスタッフに一応声を掛けてからエプロンを脱ぐ。裏口から外に出て店の入口へ回ると、すでに母親とパーシヴァルが対面しているではないか。

「稼ぎ時に邪魔をしてすまない」

「とんでもございませぬ。うちに騎士様が一体何の御用でございましょう?」

「一つ確認したいことがある。この女将の娘はヒューマンの女兒で間違いないだろうか？」

それ犯罪者の身柄確保とかで聞くやつー！ 悪い予感しかない言い方に、母親の鋭い眼が一気に俺を貫いた。

「あんた一体なにやらかした!?!」

「ご飯奢る約束しただけだよー！」

本当かと視線で問われる。嘘は言っていない。暫し母娘で無言の睨み合いが続いたが、納得した母親が折れて溜息を吐いた。

「娘が何かご迷惑をお掛けしたのでしよう。申し訳ありません、よろしければうちで昼食をお召し上がりください」

綺麗な七十五度のお辞儀をする母親に困惑するパーシヴァルだったが、その後ろで俺が口元に人差し指を添えて手招きすると観念したように店へ入ってきた。

騎士が入ってきたことで店内がざわつく。そんな衆人環視の中で食事をしていても味なんてわかるまい。うちのご飯は美味しいんだから、ちゃんと味わってもらわないとな。

ということ、ディナータイムでしか使わない個室部屋へご案内。無言で後ろをついてくるパーシヴァルを四人掛けの席へ着かせて、すぐにカトラリーを並べていく。ランチタイムは日本と言う食堂形式だから本当はこういうサービスは無いんだけど、今回は

特別。

「今日はロールキャベツとチーズグラタンなんだけど、どっちがいい？」

「……」

「わかった、適当に持つてくるよ」

怪しんでいるのは当然だとしても、此処まで来たなら返事くらいしてくれてもいいのに。まあいいけどさ。厨房へ走ってABセットとグラタンを少なめに盛った別皿をトレーに乗せ、パーシヴアルの元へ戻る。途中で母親が挨拶に行こうとしていたのが見えただけど、ご飯食べ終わったら呼ぶからと言えば納得して接客に戻っていった。食事中に訪ねるのは失礼に当たると思ってくれたのだろう。

個室の扉を開けたらぎよつとした顔で腰を上げたパーシヴアルが見えた。大人でも大変な量を危なげなく運ぶ俺に驚いたかな。見た目はただの幼女だもんな。難なくテーブルへ配膳していくのをソワソワしながら見ている様子に、警戒心はどうしたと言つてやりたい。

二人分の食事を準備し終えたら、俺も向かい合うように座って手を合わせる。料理に手をつけずこちらを伺うばかりのパーシヴアルを気にもせず自分のグラタンを頬張った。美味い。今日のホワイトソースも完璧だ。何百人分のソースを何時間も練つて作り上げた俺の腕の筋繊維は今甦った。はー、幸せ。

熱々のチーズを伸ばしては匙にかぶりつく。食事に夢中な俺はすっかり客人のことを忘れていた。いい加減痺れを切らしたパーシヴァルが苛立ち気にも口を開いた。

「お前と対峙した後、俺は城の医務室で目が覚めた。部下は皆、口を揃えて帰還中に俺が倒れたのだと言う。その時にはもう調査団の解散は決定していた。対象の遺物が消失していた、誰もがこの目で見たと……全てお前の言う通りになっていた」

だろうね。大方予想通りなのと、こちらの知り得ていた情報とも相違ない。優秀な相棒にかかれれば聖晶獣対策の一切無い城なんて鍵のかかってない家も同然。潜入盗聴し放題、どこぞの貴族が鬻いだったなんて要らない情報まで耳に届いた。

「目を改めて騎士団で搜索したが遺物は発見できず、その後も遺物に関しては一切の情報途絶えた」

無駄骨を折ったようでお疲れさま。あの日は街の傍まで戦艦を移動したけど、今は安全な島を見つけたのでそちらに移動済み。騎士団には悪いが絶対に見つからないと断言できる。場所さえ登録すれば私はいつでも転移可能なので問題ない。こんな便利な技術を何で空の民は継承しなかったのだろうか。実に勿体無い。

などと思考を広げていた俺はパーシヴァルの目からは上の空に映ったことだろう。

「嘘偽り無く答えろ——お前の目的は何だ？」

「ここまで話して何の反応も見せない俺に眉間の皺を深くした。パーシヴァルが怒気を

含んだ声で尚も問い詰める。

「返答次第では……」

「店内の人間を人質にでもするつもり?」

ピクリと眉が動いたのがわかりやすく見えた。それに俺は口角を上げて匙置く。今度こそしつかりと相手の目を見て口を開いた。

「一ヶ月も経つてから接触しに来たつてことは、私のことも大方調べ済みでしょう。私に至つて普通の子どもで、家族が大好きつてことも。そして、人質に取れると踏んだから態々この時間に店にやつてきた」

「当たつてるかな?」と笑顔で問えば言葉が喉に詰まっている様子。清廉潔白な騎士様に酷なことを聞いちやつたかな。

パースヴァルのことだ、予め独自に調査して私が魔物でもなく、ましてや他国の間者でもなくフェードラツへの市民であること。これだけの期間を置いて接触してきたのも念入りに調べた結果が白以外なかつたということ。そして最終的に本人に確認をするしかなくなつたと。簡単に想像できる顛末だ。

「ねえ、貴方には私がどう見える?」

「……どう、とは」

「さつき食事を運んできた時、心配そうに見守る貴方からは私がつたの子どもに見えて

いたんでしょ？　　というか、調べている時もそうとしか見えなかった。だから直接話して、何の問題もなければこれで終わろう。そう結論を出したから会いに来たんじやないのかな」

「その様な推論に至るお前をどうやってただの子どもに見ると？」

「ははっ、まったくもってその通りだ」

笑い飛ばす俺とは反対に、頭を抱えて溜息を吐くパーシヴァル。さすがイケメン、憂い顔も格好いいとかズルイな。悩みすぎて円形脱毛症になってしまえ。

『頭髮除毛の呪いをかけますか』

モテない元メンズの僻みです本気にしないでください……。

『呪いを掛けなくてもすでに衰弱しておりますが』

あー確かに、目元にうつすら隈できてるじゃん。騎士の仕事もあるのに私のことまで調べたらそりや寝る時間を削るしかないわな。可哀想にと思ったけど、そもそも俺のせいだったわ。謝罪の意味も込めて回復魔法でも掛けておくか。予備動作なしだとまた斬り掛かられそうだから、わかりやすいようにしておこう。

「ちよつと手出して」

「……」

「大丈夫、悪いようにはしないよ。この前もそうだったでしょ？」

この前も、と言った途端に渋い顔をされたが、観念して左手を伸ばしてきた。利き手じゃない点にまだ警戒心を感じるけど、確実に絆されていますな。うわ幼女強すぎない？
外見補正つてすげーわ。

手を取ってから回復魔法を行使。一瞬の奇跡に驚く暇は与えない。害を与える魔法じゃないってことはすぐに判ったのだろう、睨みが呆れに変わったのを見てまた俺は笑った。

「お前は魔女なのか？」

「なるほど、そうきたか」

それよりも！ ちよつと騎士様、うちのご飯に一切手をつけないなんて言語道断。一口食べれば目が飛び出る美味さがわかるというのに。特に俺が苦勞して練ったホワイトソースは絶品だぞ。これまでの質疑応答で無害だと判断しただろう、さあ遠慮せず！
期待を込めてじーつと上目遣いで見つめる。幼女の渾身の一撃に勝るものなし。
パーシヴァルは恐る恐る匙を握って料理を口へ運んだ。しつかりと咀嚼して飲み込むまで見届けて俺は満足。味がわかれば後は残さず食べてもらえる自信があるからな。

匙を使う手は止まらなくなったが、眉間の皺はそのままのパーシヴァルは納得がいかないとはつきり顔に書いてある。

「魔女でないならお前は一体何なのだ」

「五年前にフェードラツへで生まれてこの城下街で育った食堂の娘だよ」

「解りきった答えは求めていない」

「それ以外だと、そうだなあ……」

転生者？ 異世界人？ どれもこれも信用度の足りないものばかりだ。もはや存在そのものが嘘くさいんだよな、自分で言つて悲しいけど。んー……当たり障りのないものでいうと。

「過去と未来がちよつとだけわかる、とか」

「やはり魔女ではないか」

「違うんだけどなー」

「魔女ならば先日の件も星の運命さだめなのだろう。それならば致し方あるまい」

そういうえば魔女は未来を変えないとかありましたね。でも俺は魔女じゃないから未来視なんて出来ない。俺が知っているのはただの知識だ。

未来を、これから続く俺の人生は好きに生きると決めている。

「ねえパーシヴァル、お父君はまだ存命かい？」

問いかけに即座、テーブルナイフで俺に斬りかかったパーシヴァルはその腕を伸ばした状態で静止する。大声も上げられると困るので口も塞いじやおうね。こちらへ前のめりで身を出しているパーシヴァルの唇を優しく指でなぞる。目だけはしっかりと射

殺さんばかりに睨んできているが、二回目なのでそこまで怖くない。

敢えて呼んでいなかった名を口に出した。それはお前を知っているぞと暗に含んだとも取れる。ウエールズか、はたまた父親か。自分の記憶だけ残したのもそっちが狙いとか思ったのかな。そんな深く考えてやったつもりは無かったけど、結果的に上手く事が運んだのも確かだ。

ウエールズでは幽世に関する研究が城の地下で行われていたはずだ。それはパーシヴァルの父親から長兄アグロヴァルまで継がれ、後に破壊される。パーシヴァルがフェードラツへに居る今ならまだ研究室は存命しているに違いない。

てつきりもう死んでいるかと思っていたが、この反応を見るからに生きているらしい。よかった、それなら間に合いそうだ。

「近々ウエールズのお城に忍び込む予定だから」

記憶を得た俺には一つの目的があった。それは、ルシファーと再会すること。とりあえず一発殴るのは当たり前として、俺の失った管理者権限だが新たな管理者として登録し直す唯一奥の手が存在する。その為には創造主であるルシファーの認証が必要なのだ。おかげで関わりたくもない主人公たちとの接触も必須、となるとパンデモニウムも然り。覇空戦争を知らない今の俺では赴けない場所だ。行けないなら、場所を知っている現地民を喚べばいい。

関連書籍を手に入れるついでに、アグロヴァルが後を継ぐ前に負の遺産も片付けておこうという善意です。泥棒したくないから奉仕活動で釣り合い取ろうとか思っていないよ。ほんとだぞ。

「ふふ、安心しなよ。つて言っても信用できないよね。これ前回と全く同じパターンだし」

ニコニコと眺めるだけの俺にやがて諦めたのだろう、視線から敵意が抜けた。指を一振りして拘束を解く。

解いた瞬間にまた襲いかかるかとも思ったが、予想は外れ、座り直しておとなしく食事を再開し始めた。表情は険しいままだけど。さっきので確実に敵わないと理解したかな。

「次の休みっていつ？」

「……」

「返事がないならこの後すぐに連行しちゃうけど」

「……七日後が非番だ」

「前日の勤務は何時に終わる？」

「夕刻には宿舎に戻っている。……貴様、何を企んでいる？」

「なら六日後の夜中、北門近くの噴水広場に集合ね」

今度は一体何だと怒鳴りだしそうな口を先制して魔法で押し留めて私は笑う。
「こっそり出てきてね。急な里帰りとか知られたくないでしょう？」

『報告。対象が合流地点へ移動を開始しました。到着予想時刻は三十分後です』

ペンを握る手を止めて、俺は現時刻を確認するも未だ日付すら越えていない。約束は夜中と曖昧な表現をしたが、それでも人目を避けるには早すぎる。城下は人口密度が格段に高い。田舎や地方とは違い街の明かりは朝まで灯つているし、寝静まる時間も相応に遅い。

騎士団の宿舎を抜け出すタイミングが今しか無かったか、それとも私が子どもだからと気を使ってくれたのか。……いや、無いな。あれだけ人外感を出しておいて今更までも子ども扱いをしてくれるはずがない。

とりあえず俺も出るかと、時間潰しに纏めていた日報を片付ける。最近の売上増加に比例して仕入と経費の項目も増える一方、事務処理を担当していた祖母の手が回らなくなってしまった。把握漏れも多く見兼ねて俺が手伝ってからは何故か俺の担当となり、毎夜風呂上がりに机と向き合う生活だ。確実に子どもの仕事量じゃないぞと不満はあるが、適材適所なので不本意だが受け入れている。

丁度筆記用具をしまい終わった時、控えめに部屋の扉を叩く音がした。相棒から事前

に母親が向かつてきていると知らされていた俺は躊躇いなく訪問者を迎える。

「明かりがついてるからもしかしてと思ったたら、こんな時間まで起きて何してたの？」

「ちよつと事務仕事してた。でも今終わったところだから」

「早く寝なさいよ。今はあんたが店の要なんだ、無理して倒れられでもしたらあつと言う間に閑古鳥さ」

「さすがにそれは言い過ぎ……」

とも思えない、という続きを無理やり飲み込んで。

えーと、俺が今掛け持ちしてる仕事が……昼の日替わりメニュー決め、仕込み作業の指示、事務仕事に仕入れ業務等など。風邪でも引いて寝込んだら店終いしそうだ。健康には気をつけようと固く決意する。

「まあ明日お休み貰うし、一日中寝て過ごすつもりだから」

「昼過ぎても起きてこなかったら叩き起こしに行くからね」

「ご飯食べてからもう一回寝直すならいい？」

「グウタラしないで子どもらしく外で遊び回っといで！」

「それじゃあ休みにならないじゃん……」

おやすみと母親に就寝の挨拶をして扉を閉めた。では宣言通り布団へ、とはいかない。寝巻きから普段着へと手早く着替えてコートも羽織っておく。後は扉へ人避けの

術を掛ければ完成。

「登録座標、北門前噴水広場へ転移」

『イエス、マスター』

フェードドラツへは比較的温暖な気候の島だが、それでも夜は冷え込む。暖房設備など殆ど整っていないこの時代、防寒具対策をしつかりしなければ夜半に外出など出来るものではない。

待ち人が来るまでの時間潰しに俺は噴水の縁で寝そべって夜空を見上げていた。今日は雲一つない快晴。さすが空に浮かぶ島、星が近いのか街灯の明かりにも負けずに輝いている。その輝きに負けない強い赤色が視界に映り込んだ。

「こんばんわ、騎士様。いい夜だね」

返事はなく、黒い外套を纏ったパーシヴァルが私に手を伸ばした。有り難くそれに捕まり身体を起こす。

「子どもがこんな時間に夜遊びとは感心せんな」

「固いこと言いつこなしだぜ、パーさん」

「誰がパーさんだ」

背中に付いた砂を払おうと腕を伸ばそうとしたら、それを察したパーシヴァルがささっと優しく払ってくれた。正直この子供の体だと腕の長さが足りない等不便が多い

ので助かる。

「じゃあ早速、と向かいたいところだけど」

先にこれを渡しておくね。そう言いながら俺はポケットから金属製だが細身の腕輪を取り出した。

「なんだこれは」

「一言で言えば便利なモノ」

「巫山戯ているのか？」

馬鹿馬鹿しいと吐き捨てるも素直に腕輪を装着してくれる辺り、実は結構ツンデレだよ。段々パーさんの扱い方がわかってきた気がするよ。基本的に善人だから悪いことじゃなければ聞いてくれるし。

「ほらほら、試しに何でも言ってみてよ」

「そんなことより、これからどうやってウェールズまで行くつもりだ？」

『隠蔽迷彩投影後、ウェールズ領内の安全なポイントへ転移。目的地まで飛翔術で向かう予定です』

驚いた顔で周囲を見渡すパーシヴァルに俺はにんまりと笑う。俺に言ったつもりが脳内から返答があればそりゃ驚くわな。

「これは一体……遺物か？」

「まあそんなようなものだよ」

渡した腕輪の正体はこれから隠密行動をする上で絶対に必要となる味方識別の為に俺が船から持ってきたアイの携帯端末だ。現代だと確実に過去の遺物扱いされるだろう一品だが、勿論性能に制限はかけてあるので悪用されても問題ない。パーシヴァルに限ってそんなことはしないだろうという信用もある。逆にこんな怪しさ満点のものを拒否らずに身に着けていてくれる確率の方が低いと思っていたのだけど、宛が外れてよかつたよかつた。

「お前自身が怪しい存在だというのに、渡してくる物がそうでないか？」

「ぐうの音も出ないわ」

「お前を警戒するのも今更すぎる上に、これ以上怪しんだところで何か進展がある訳でもない。それより、いつまで此処にいるつもりだ？」

そうだった、いつまでも遊んでいる暇はなかったんだ。俺はアイに命じて転移魔法を展開する。パーシヴァルもしつかり範囲に入っているのを確認して、念のために手も繋ぐ。身長差がありすぎてちよつと背伸びしないと届かなかつたのが悔しい。それを察して屈んでくれたパーシヴァルの優しさが更に腹立たしい。絶賛成長期なのだが今日から毎日牛乳、いやカルシウム食品を食べようと決意した。

『警告』。カルシウムの摂取だけでは身長を伸ばすことは不可能です。効率的な成長の促

進には——」

「うるさい！　たくさん食べて動けば大きくなるだろ!?　あとパーさん隠してるけど笑ってるのバレバレだからな!!」

俺を見ないように首を反らしているが反応で丸わかりである。やり場のない怒りについ癖で地団駄を踏むが深夜に近所迷惑だとパーシヴァルに抱き上げられてしまった。しかも所謂お姫様抱っこである。ので仕方なく硬い甲冑の胸元をポカポカと殴ることにした。精神は大人のつもりだけど、やっぱり子どもの身体に引きずられるんだよな。幸いパーシヴァルは子どもに寛容な方なのか、頭まで撫でられる対応に俺の怒りは羞恥心も合わさって許容量オーバーです。恥ずかしすぎて顔が上げられない。

「お前もそういうところは年相応なのだな」

「……どこからどう見ても幼気な女の子ですうー」

「不貞腐れても可愛いだけだぞ」

我ながらこんな生意気な子どもどのどこに可愛げがあるというのか。本気で言っているのなら眼科に行くことを勧めるぞ。

そんなやり取りの合間に転移は無事完了していた。アイのアナウンスに顔を上げればもうそこは見慣れた町並みではなく、鬱蒼と茂る森の中だった。魔力の残滓で僅かに周囲は照らされているが、ほぼ暗闇に近いこの場に留まるのは一目で危険とわかる。

「ときにパーさんや、飛翔術の経験は如何程で？」

「有るわけ無いだろう」

「んとね。術式はこつちでやるから難しく考えずに飛びイメージをしてみて。おすすめはジャンプしてそのまま上に飛び感じで」

「ふむ、こうか？」

俺を抱えたままトンと跳躍した彼は、そのまますんなり森の木々を飛び越え上空へと浮上した。人に抱えられて飛ぶなんてこと久々すぎて思わず変な声を上げてしまったわ。せめて飛ぶ前に一言ください。心臓に悪いから、マジで。

「えーと、ウエールズの方角は……」

「ここからだとは北だな。このまま向かって問題は？」

「ないよ。強いて言うなら手を離してほしい」

「痛かったか？」

「ちがーう！ 私も一人で飛べるの！」

「それならこのままでもいいだろう」

どうやら離すつもりはないようだ。ムスつとしながらお言葉に甘えてパーシヴァルの身体に凭れ掛かる。先程から俺の反応で遊ぶ悪い大人め。存分にイスの刑に処してやろうぞ。

垂直立ちよりも僅かに前のめりな体勢でウエールズへと飛び始めたパーシヴァル。その飛翔術に不安定感は一切なく、俺は抱えられた腕の中から景色を楽しむ余裕さえあった。あ、山の中腹辺りに龍脈はつけーん。ふむふむ、資源豊富で中々よさげな環境ではないか。また機会があればじっくりとウエールズも探索したいものだ。

脳内でアイに場所をマーキングしてもらいながらあちこち視線を向けていると、グンと高度が上がる。山を迂回するよりも飛び越える方が早いと判断したのだろう。そして山を越えた先、視界に飛び込んでくるのは城壁に囲まれた街並み、中心部に位置する城の姿だった。

「あれがパーさんの実家？」

「そうだ。どこに降りればいいんだ？」

「屋内に入れるところがいいな。ていうかさ、なんかパーさん急に警戒心薄くない？」

普通もつとこう、魔物を相手するみたいに一歩引いた距離から接するものだろうに。この前のやりとり忘れたの？ 今から向かうのは貴方の故郷ですよ？ 家族に何されるか不安じゃないの？

俺の疑惑の目線にすっかり眉間の皺が取れたイケメン顔が呆れたようにこちらを向く。

「俺は今夜こっそり里帰りに行く。それだけだろう？」

「それがただの名目だつてわかつてるくせに」

「だとしてもだ。お前は嘘は言わないし約束も守る。事情はどうであれ、誠実であろうとする姿勢は好ましいものだ」

「……買い被りすぎて後で泣いても知らないよ」

「その時はお前を切るしか無いな」

勝てつこないつてわかつてるくせに、よく言うぜ。

何事も無ければいつそ今日の記憶ごと消して、パーシヴァルには元の生活に戻つてもらうのもいいかもしれない。だがここまできてそれは無理だろうと脳内で鳴る警鐘が告げている。

『警告。蓄積情報データベースに存在しない反応を感知』

「敵対反応は？」

『ありません。侵入に問題なしと判断します』

「なら予定変更は無しだ。このまま進む」

『了解。隠蔽状態を維持します』

このやり取りも端末を渡したパーシヴァルには筒抜けだ。放たれる真横からの威圧に俺は毛穴が広がる感覚を覚える。自分の故郷でこれから確実に何かが起きるとわかった以上、気配が険しくなるのも当然だろう。伝わってくる緊張を解すように、俺は

彼の頬へ手を添えた。

「言ったでしょ、安心してって。過程はどうであれ、パーさんの害にはならないよ」

「……不安しか無いが、その言葉を信じるぞ」

「まっかせなさい！」

俺はぺたんこの胸を叩いて大きくサムズアップして見せた。